

〔解説〕 まちづくりに関する「団体」を検討する視点

竹内氏の講義は、地域の「団体」が、教育や文化といった側面から、まちづくりにどう関わっているかが中心であった。紹介された「鳥の劇場」は、まだ、地域実習先の一候補として検討いただいている段階とのことだが、まちづくりを考える際に、団体は、重要な存在として意識されることが多いだろう。

しばしば、活発な活動をする団体には、中心的な役割を担う人、いわゆるキーパーソンがいる。「鳥の劇場」の場合には、団体の主宰である演出家の方がそうであろう。時間の制約もあって、講義では簡潔な紹介があったのみだが、竹内氏が言うとおり、キーパーソンに着目して、経緯や活動の理由などを伺うことは、事例を理解するためには不可欠であり、ひいては、団体にとって、地域がどういう存在かを検討することにもつながるであろう。

また、団体が地域で活動するために、どのような仕組みが存在しているかということにも、目を向ける意味があると考えられる。たとえば、竹内氏の説明では、「鳥の劇場」は、廃校を改修した施設を活用しているという。地域によっては、劇場などの文化施設が設置されている場合もあるだろうが、地域における施設の存在は、団体の活動に影響しうるであろう。さらに、資金的な補助も、団体の支援となりうる。しばしば、施設の設置及び維持や、補助金の交付は、行政によってなされているため、これらの仕組みを把握するためには、その地域の行政を検討する必要もあるだろう。もちろん、竹内氏が「住民主体のまちづくりの機運が、劇団を受け入れる土壌となりました」と述べているように、地域性も団体の活動と無縁ではない。

ところで、他の地域実習に関する講義でも話題となっているが、「鳥の劇場」の紹介でも、学校教育への関与が語られている。「鳥の劇場」

は、大学の協力を得て、鳥取市立鹿野学園などで、「トリジユク」という演劇ワークショップの取り組みをしているという。この実践から、地域と学校教育の「協働」の意義を見出したり、大学の地域貢献を検討したりすることができるかもしれない。しかし、地域住民にとって学校がどういう存在か、地域の団体にとって学校教育に関わることはどのような意味があるかを考えることも重要であろう。

たとえば、鹿野町での学校の統廃合について、学校を廃校にするという選択肢は、子どもが隣町に出ていくだけでなく、「鹿野地域のアイデンティティが失われてしまう」という説明があった。この説明からは、地域住民は、地域の象徴的な、あるいは、中心的な施設として、学校を捉えているように窺い得た。このような認識においては、団体にとって、学校教育のカリキュラムに関わることは、地域を支えることにつながると考えられよう。

竹内氏の説明からは、子どもたちが地域の文化等を知ることによる「持続的な地域づくり」が、地域の団体が学校教育に貢献するねらいとして読み取れる。しかし、さらに、団体に所属する人々にとって、学校教育に関わることをどう受け止めているのかを問うことも、地域と学校教育の協働を進めるのであれば、意味があることであろう。

なお、鳥取市のまちづくりに関する活動をしているのは、「鳥の劇場」だけではないだろう。また、「鳥取市周辺」といっても、一地域の特色が市内全体にみられるとは限らないことに注意が必要である。地域実習だけで、鳥取市全体について把握することは困難であろうが、一地域の検討を通して、「コミュニティ」を考えるための視点が得られることを期待したい。

(仲村拓真)